

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

# No. 303



**1997 FEBRUARY**



**日本ヒマラヤ協会**  
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 平成9年度から年会費が1万円になります

H A Jの通常会員の「年会費」が、平成9年度（平成9年4月1日～平成10年3月31日）分から1万円となります。

これは平成6年5月に開催された理事会において年会費の改定が検討された過程で、当時6千円から1万円に改定するにあたり、段階的に8千円を経て平成9年度から1万円と決定されたものであります。皆様のご理解をお願い致します。

年会費は前金制となっておりますので、6月30日までに納入をお願いします。

## ニンチン・カンサ募集

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサ(7,206m)です。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

### 記

1. 期 間:1997年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度(隊は成立しています)
3. 負 担 金:80万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

## 地図と図書の販売

1. 地図(いずれも中文1枚1,500円 送料込み)  
珠穆朗瑪峰:10万分の一(東はマカルーから、西はチョー・オユーまで)  
喬戈里峰:10万分の一(東はガッシャーブルムIから、西はクラウン、チリンまで)  
公格爾山-慕士塔格:10万分の一(コングールとムスターグ・アタである)
2. 地図(いずれも1枚2000円 送料込み)  
青藏高原山峰図 縮尺1:2,500,000 中・英文あり  
中国山峰一覽図 縮尺1:5,500,000
3. 図書  
中国登山指南(4,500円+送料340円) 中文  
雪域神山(6,000円+送料700円) 写真集。

## 表紙写真

ネパール、ダモダール・ヒマール山群にあるチュルー・6,400m峰(南東峰)に登った。コルをはさんで東方にチュルー・6,059m峰を見る事が出来る。その峰の後方にはヒムルン・ヒマール(7,126m)、無名峰(7,097m)、ネムジュン(7,139m)などベリ・ヒマールの山々を望む事が出来た。

野沢井 歩

## ヒマラヤ No.303

1. PEOPLE	RUSSEL BRICE
2. カラコルムの氷河(4)	井上重治
8. 中高年? ヒマラヤ流れ旅(11)	
インド(3) ガンゴトリを巡る(2)	阿部 淳
12. 小カラコルムからパミールへ(2)	岩崎 洋
15. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉	
19. ネパール・ヒマラヤの概要	
24. 寸感・事務局日誌	

ラッセル・ブライス氏は、ニュージーランド南島の東海岸にあるクライストチャーチ生まれの、44歳。現在はフランスのシャモニに在住しながらエヴェレストやチョー・オユーなどを中心に、ガイド付き公募登山隊を組織してガイドとして活躍している。

今回の来日は、96年秋にチョー・オユーでガイドした田部井淳子さんの招待によるもので、12月11日に講演を行い、氏自身のヒマラヤ登山の体験と、日本でも最近話題になっている「ガイド付き国際公募登山隊」の実態について紹介した。

氏は、ニュージーランドの山々で腕を磨き、ヒマラヤでもアマチュアとして数多くの高峰登山を実践しているが、とりわけ88年夏、イギリス隊に参加してエヴェレスト最後の課題と云われた東北東稜（現在の北東稜）の第4ピナクルをハリー・テイラーと二人で越え、北東稜（現在の北稜）とのジャンクションでビヴァークし、実質的にこの山の課題を解決した登攀が光る。降雪のため登頂は諦めてノース・コルに下ったものの固定ロープもなく下降も危険なものだったと云う。氏は、この登山をもってアマチュア登山者としての活動に一区切りをつけ、プロのガイドの道に専念することになったようだ。

89年には、ガイドとしてヒマルチュリの南面に入り、西峰から南に延びる困難なルートに挑み、客をガイドして第二登に成功するなど、アルピニストとして磨いた腕を十二分に発揮している。

最近の氏は、エヴェレストやチョー・オユーなど対象の山を限定してガイドしているが、ガイド付き国際公募隊にも様々な会社があって、経済の大原則である料金の安いところに客が流れていく実態もあると云う。しかし、氏自身は、商売の舞台を提供してくれている地元であるネパールにへも、何らかの形で利益を還元しなければならないと考えており、その一つとして、雇用するシェルパ等については、規定にある賃金の他に、自分が着用しているウェア等、同じ物を支給しているとのことだ。同じ考え方から、シェルパ達に対して



環境に対する教育にも力を入れていると云う。

また、最も興味を引いたのは、このような氏のガイドとしての信念から、同じ業界の標準化を志向していることだ。つまり、安くて悪いサービスと安くていいサービス、高くて悪いサービスと高くていいサービスの質の均一化を目指すということである。

このようなことが本当に実現することは、クライアントである登山者にとって嬉しい限りではあるし、ガイド付き登山の世界でそのようなことが実現し定着すれば、アマチュア登山隊に付くシェルパ達は相対的に質の低い者達が多くなり、そのことが引き金になって、シェルパ・レス登山の時代が実現することになるかも知れない。

氏はまた、クライアントである客のリクエストが八千メートル峰やエヴェレストに集中し、数多く存在する魅力的な七〜六千メートルの山々がガイド付き登山、つまり商売の対象外であることを苦笑いしながらも認める。

また、ガイド付き公募登山隊のガイドは隊のリーダーであって、決定権はガイドにあり、クライアントの技術や体調によっては登山を中止して下山させたことを具体的な例を挙げて報告した。

最後にガイドにとってもクライアントにとっても、設定されたガイド料がプレッシャーとなり、それによって遭難につながる恐ろしさに警鐘を鳴らし、適正なガイド料を模索することが大切であることを強調する。質の高いガイドと見受けた。

ラッセル・ブライス 1952年7月3日生

# カラコルムの氷河(4)

井上 重治

## 3. ゴンドゴロ氷河とチャラクサ氷河

ゴンドゴロ氷河とチャラクサ氷河はともにバルトロ氷河の南に位置するマッシュャブルム山群を流れる中規模氷河である。前回のレポート（ヒマラヤNo.284）でゴンドゴロ氷河は不活発で、前進も後退もしていないと報告したが、1995年夏の詳細な調査で、この結論は適切でないことが分かった。3300mのゴンドゴロ氷河舌端の調査から始めて、4150mのダルサンパを経てヒスパーとの中間地点まで調べた。

ゴンドゴロ氷河舌端はパサー氷河と同じように50mくらいの切り立った青い氷の断崖になっており、その左岸寄りに不気味に融水の吐き出し口があいていた。氷壁の最上部からは氷河の運んできた岩石が次々に落下し、崩壊した氷塊が濁流を越えてかなり遠くまで転がってきていた。現地ガイドはここは非常に危険な所で、絶対に近寄らないように注意を受けた。たまたま1996年夏にモンブラン周辺の氷河見物をしていた人が、大規模な舌端氷の崩壊に巻き込まれて大勢負傷したというニュースを耳にして、この時のガイドの指示の正しいことを実感した。ゴンドゴロ氷河の舌端が厚い岩屑に覆われずに剥き出しの氷であることは、この氷河が極めて活発に動いている証拠である。舌端近くの川原にはエンド・モレーン（終末堆石）は見当たらなかったが、シルト（氷河が砕いた砂よりも細かい岩屑）がたくさん堆積しており、かつてここに氷河湖のあったことを示している。実際昨年までは氷河湖があったといわれる。それが決壊して大量のエンド・モレーンも流してしまった可能性がある。舌端の下流約50m先の右岸のモレーンの中に化石氷と呼ばれる停滞氷（dead ice）の

融解穴が二箇所認められた。1992年秋にセイチョウから撮った望遠写真でみると、氷河末端はdead iceの近くまできており、3年弱で約50m後退したことになる。

ゴンドゴロ氷河のサイド・モレーンの上から眺めると、この氷河は少なくとも性格の異なった二本の氷河の合体であることが分かる。右岸に近い所を流れる氷河は純白で、これは5364mのマッシュャブルム・ラ（マッシュャブルム峠）に源を発している。一方、左岸寄りを流れる氷河は真っ黒で、これはゴンドゴロ・ラ（ゴンドゴロ峠、約5600m）から発している。氷河は合体して、中央モレーン

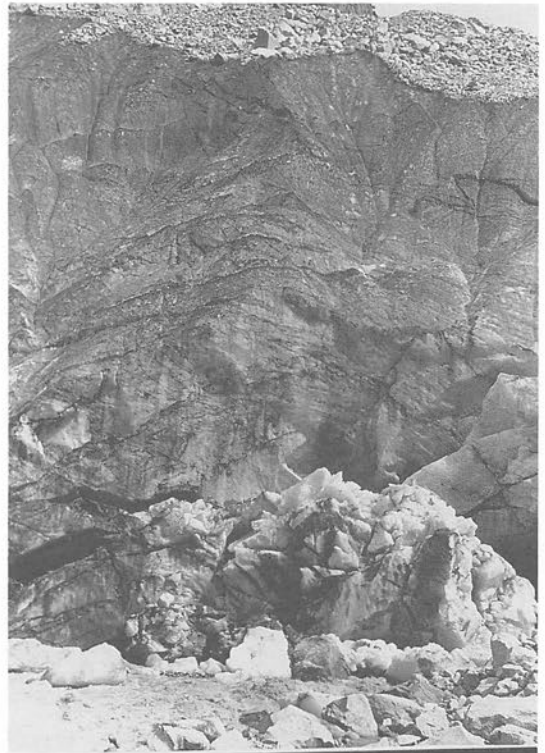


写真10. ゴンドゴロ氷河舌端  
高さ40-45mも氷崖になっている

を除いてはあまり顕著な氷の色差はないのが普通で、ゴンドゴロ氷河のように黒と白の帯が下流まで並んで流れるのは珍しい。近くで観察すると、黒い帯では氷の破碎が著しく、いたる所に巨大な氷の断面がのぞいていた。その中には、磨滅した石を抱え込んだ跡と考えられる丸い穴が無数にあって氷があった。恐らくこの氷塊は氷河の底から押し出されてきたものと思われた。その理由は川と異なって氷河で運ばれる岩石は尖っており、丸い石は氷河の底を流れる融水によってできる以外には考えられないからである。多分信じられないような巨大な氷の圧力で、氷河の底の氷が柔らかくなり、ここに底水で磨かれた丸石が挟みこまれたが、その後の氷河の混乱でひっくり返って側面に顔をだし、融解によって丸石が外れたものであろう。黒い氷帯の最下流はかなりの岩屑が堆積しており、その上にロニセラ（すいかずら科）の樹が一本1.5mほど成長しているのに気付いた。小型ヤナギラン（チャマエネリン、あかばな科）のような草花はよく眼にするが、立派な樹が氷河の上に生えているのは後にも先にもこれ一本だけ

であった。しかし、この樹もいずれはクレバスに落ちるか、舌端から融水に転落する運命にある。小さな氷河池が随所に見られたが、その一つが突然大音響とともに沈下したのにはびっくりさせられた。

白い氷帯の近くまで行けなかったので詳しくは分からないが、ガイドブックにも記載されているマッシュャーブルム・ラ（バルトロ氷河のコンコルディアからフーシェへの抜け道）が数年前から通行不能になっていることを考えると、少なくとも白い氷河の上部はかなり荒れてきてクレバスがたくさんできているものと考えられる。それにしても、似かよった所でなぜ黒い氷河と白い氷河ができるのであろうか。恐らく黒い氷河の活発な土砂の盛り上げ作用に加えて、ゴンドゴロ・ラ周辺の脆い岩質から落石が絶えないことが原因ではないかと思われる。事実、降雨の中をダルサンパに野営していると、落石の音が絶えず、大規模な岩なだれがダルサンパ池の山側を半分埋めていた。一方、向こう岸の右岸では4分近くも続く長大な雪崩がひっきりなしに起こり、このために白い帯が



写真11. ゴンドゴロ氷河の上流部。手前の黒い氷河と奥の白い氷河が合流している。背後の右手前按部は今は通行不能のマッシュャーブルム峠

作られているように思われた。

ちなみにマッシュャブルム・ラが通行不能になってから、ゴンドゴロ・ラがバルトロ氷河からフーシェへ下る黄金ルートになってきている。バルトロからアスコレ経由でスカルドに戻るよりもフーシェ経由の方が2日短縮できるという。1995年夏など、K2登攀中のスペイン隊の物資補給をフーシェからおこなっていたが、コンコルディアからもたくさんのトレッカーがこの峠を利用してやってきた。その最大グループはトレッカー16名、ポーター60名（最大97名）からなるドイツ隊で、アスコレからフーシェまで20日間のトレッキングだという。しかし、この新ルートにも泣きどころがある。それはフーシェ～スカルド間のジープ道がほとんど毎年のように土石流で崩壊するのである。私は1992年、94年、95年の3回フーシェを訪れたが、すべて片道は通行不能で、95年などはフーシェからカプルーまで丸二日間、落石の危険におびえながら歩かされた苦い経験をもっている。

フーシェ村の長老、ロスタ・マリ（79歳）に直接尋ねたところでは、ゴンドゴロ氷河は50年前は現在の舌端より2キロ奥のゴロンの近くまで後退していたという。それが毎年前進してきて、一度は現在の舌端より100m先まで進んでから現在位置まで後退したという。只今は夏は後退、冬は前進の一進一退を繰り返している。要約すれば、ゴンドゴロ氷河は大変活発に動いている氷河といえる。

これに対して、隣のチャラクサ氷河の舌端は全体に厚い土砂で覆われており、その中の二箇所から融水が流出していた。大昔に築かれた大きなエンド・モレーンの背後に新しいエンド・モレーンが形成されつつあった。これを見ても明らかに氷河は大きく後退しつつある。チャラクサ氷河の下流部も若干の氷河池を除いては、厚い土砂で覆われており、中流部もアイスフォール（氷瀑）を除いては大きなクレバスがなく、総体的におとなしい氷河の印象が強かった。さらに中流部で同規模のチョゴリサ氷河と合流しても、目立った変化は認められなかった。先程のロスタ・マリの話でも、チャラクサ氷河は10年前はセイチョウの近くに舌端があったというから、それより4キロも後退し

たことになる。末端の小さな氷河湖の形成はゴンドゴロ氷河よりチャラクサ氷河の方が多という。6月から8月にかけて1回ないし2回氷河湖が造られた。しかし、この氷河湖の決壊による洪水は小規模なもので、被害は橋を流されたくらいで、人的被害はなかったという。

それにしても尾根一つ隣合わせた二つの氷河の挙動はすこぶる対照的である。あまり気象条件が違っても考えられないのに、なぜ二つの氷河の挙動がこうも違うのか不思議な話である。恐らくその氷河固有の因子が深く関与していると思われるが、その詳細は明らかではない。

#### 4. バツラ氷河の舌端とパスー村の大洪水

バツラ氷河はパスー氷河の北を流れる長さ58キロにも及ぶ長大な氷河で、バツラI峰（7785m）を盟主とするバツラ山群の中を複雑に流れてフンザ河に注いでいる。この氷河が多くの人々の関心を集めたのは、1970年に融水の流路が大幅に変わり、下流に敷設してあったカラコルム・ハイウェイを壊したからである。その後もしばしば流路変更があって、その都度新しい橋を架け替えるはめになったことによる。このため、1974-75年にかけて、中国の氷河学者による大規模な氷河調査がなされた。それによると、年平均のバツラ氷河の融水量は毎秒29.4トン、6-8月の夏期は89-125トン、最大の流速は毎秒7-8mと観測された。1994年9月に中国の学者によってこのバツラ氷河の再観測がなされ、それによると、末端の氷崖の位置は1966年から1980年にかけて122m



写真12・バツラ氷河の舌端。中央の氷壁には融水穴がなく、左岸よりの氷肩の下から融水が流れ出ている。

(年平均9m)前進した。1979年からは前進速度がぶって年5mとなり、1985年に前進と消耗が均衡して動きが止まった。1994年9月には再び104m後退した(年平均11.5m)。出水口は1978年から94年の16年間に約100m後退し、カラコルム、ハイウェーの橋脚で河底は2m(年平均0.12m)低下した。

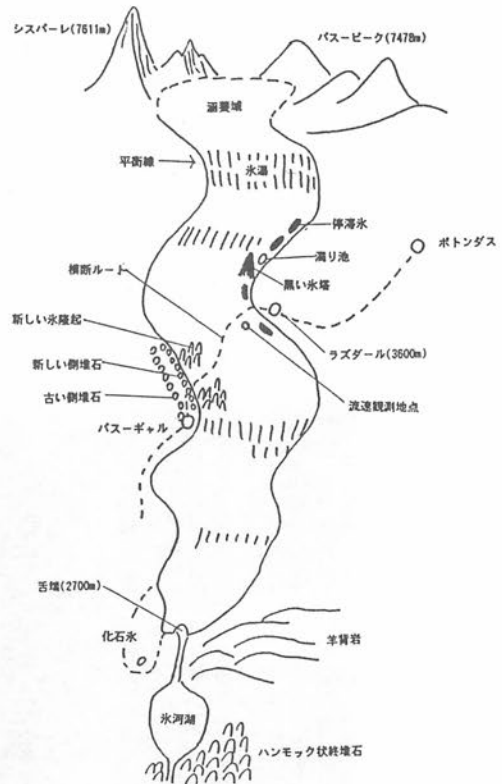
1995年10月に私は初めてバツラ氷河舌端を訪れた。舌端の規模はさすがに長大な氷河だけに、グルキン氷河やパスー氷河とは比べものにならないほど大きい。トレッキング・ルートをはずれて氷河末端までゴロゴロした巨岩(迷子石)をぬって進んだが、なかなか着かなかった。エンド・モレーンの構造も複雑で、氷壁のはるか彼方までモレーンの端が延びていた。モレーンの所々が緑色になっていたが、これは氷の融水に植物が生えているためだという。

バツラ氷河の舌端は厚い土砂に覆われていたが、二箇所だけ氷崖が露出し、このうち左岸寄りの穴から融水が流出していて、片方は閉まっていた。やがていつかこの口も開いて融水を吐き出すものと思われる。本来水平であるべき氷層が90度もねじれていて、相当な氷層の変動があったことを物語っている。氷壁の高さは45-50mはあった。パスー出身のガイドの話では、1993年にこの融水穴が倒壊してきた大量の氷塊と土砂のために塞がれて、2時間ほど川の流れが完全にストップしたという。それが内部圧の高まりとともに、出口をふさいでいた氷が吹き飛ばされて、多量の水と氷が噴出してきて、ちょっとした大水になったという。自然の演出した壮大なスペクタクルであったに違いない。

パスーの古老、モハンマド・バティ・カーンの話では、50年前のバツラ氷河はカラコルム・ハイウェーをはるかに越して、フンザ河の間近まで延びていたという。彼の表現によると、ゆっくり流れるグルキン氷河は男性の氷河、早く流れるパスー氷河とバツラ氷河は女性の氷河だという。日本の常識ではこの逆のように思えるが。パスー村では現在灌漑用の水は全面的にバツラ氷河に頼っている。パスー氷河からの導水が失敗した24年前にも水路の建設を試みたが、当時はバツラ

氷河が高すぎて建設に失敗した。その後、氷河レベルが下がってきて地面に近くなったので、やっと水路ができるようになったという。ところが、バツラ氷河が激しく変動するために灌漑水採取口の水位がずれて水が採れなくなることが再三あった。その度に村人が総動員で新しい水路を築いてきたが、現在9度目で、1983-84年にカナダの資金援助で完成させたという。この水路の長さは8キロもあり、ゆるい勾配をつけて山肌を掘るのは並大抵のことではない。さらに、通水中に大量のシルトが溜まるので、絶えずシルトを除くことも大変な作業である。

昔の氷河を語るとき、モハンマド・バティ・カーンと現地ガイドから聞いたパスー村の氷河洪水の話省くわけにはいかない。パスー村はタジキスタンからアフガニスタンのワハン回廊を経てやってきた、タジク人のコーバ兄弟が開拓したといわれる。いまから11-12世代前のことである。タジク人の祖先はパルシャといわれる。彼らはバツラ氷河の広大なアブレーション・バレーと当時あつ



▲パスー氷河概観図

た森林に着目してこの地に定住した。能力的に優れた彼らは、けわしい所にも登って木を切りだして家を建て、パツラ氷河脇に牧場を開いて家畜を飼い、小麦を作って自給自足の生活を始めた。熱心に教育を施したほか、中国のタシュケントやタジキスタン、アフガニスタンとの交易事業にも成功したという。当時はクンジュラ峠ではなく、ミンタカ峠が盛んに利用され、ヤクに乗ってパツラ氷河を越えていた。コーバ兄弟のうち二人はさらに第二に入植地を求めて、中国のシムシャルへ移住したといわれる。フンザ河は深い渓谷になっていて、その川幅はせいぜい4mくらいしかないので、川越しに家具の受渡しができたという。水深は腰くらいまでであった。このため、パツラ氷河の扇状地のフンザ河寄りのできたパツラ部落も当時は大変広がった。ここはポロ競技が盛んで、川べりに広大なポロ・グラウンドがあった。男たちはなげなしの金をはたいてポロ用の馬を購入したという。そして、秋の収穫のあとにダンスとポロの試合を行って楽しんだ。大きな自然災害もなく、村は順調に発展していった。

ところが、今から120年前に3回も大洪水が襲ってきて、村は完全に破壊された。最初の洪水は全く予告なしにやってきた。後で調べて分かったことであるが、パツラ村の直ぐ上手にシムシャル川が流れこんでいるが、そのシムシャル川のはるか上流、シムシャル村よりも上流にあるヤズギル氷河よりもさらに3時間も上流にあるベルジュラ氷河が、突如サージを起こしてシムシャル川に前進してきた。そのために巨大なダムができ、

それが決壊したのが大洪水の原因であった。このダムが途方もなく巨大であったことは、現地を訪れたパツラのガイドが首を一杯にのぼして見上げたはるか上の岩壁に、大昔のダムの水位を示す痕跡があったという。高さは五千米くらいあり、パツラの裏山であるトボブタン(6250m)がそっくり入れるくらいの壮大な大きさだということからも押して知るべしである。これだけの巨大ダムになるためには、相当な日数がかかったはずであるが、誰も住んでいない奥地にできたダムのため、その間誰も気づかなかつたのである。この大洪水で、昔のシムシャル村は一軒を残してほかは全部流され、パツラ村でも大半の家が流された。人的被害の記録はないが、相当な犠牲者がでたことは想像にかたくない。当時シムシャルはゴジャール地方でも人口の多い村で1900人くらいいたと推定されている。またパツラ村には300軒の家があったという。大家族主義なので、一軒10人として3000人の人口になる。現在のパツラには725人しかいない。この大洪水のため、幅4mのフンザ河の深い渓谷は一夜にして幅1.5キロに達する底浅い川原になり、ポロ・グラウンドも全くなくなってしまった。

しかし、生き残ったパツラの人々は2回目からの洪水に対しては知恵をしぼった。のろしの利用である。親戚の多いシムシャルの人とも協力して、洪水が発生したら、次々に松明ののろしをあげて下流の人々に知らせることにしたのである。日本の戦国時代の情報伝達と同じ方法なのが興味深い。こののろしによる警戒信号で、以後は人的

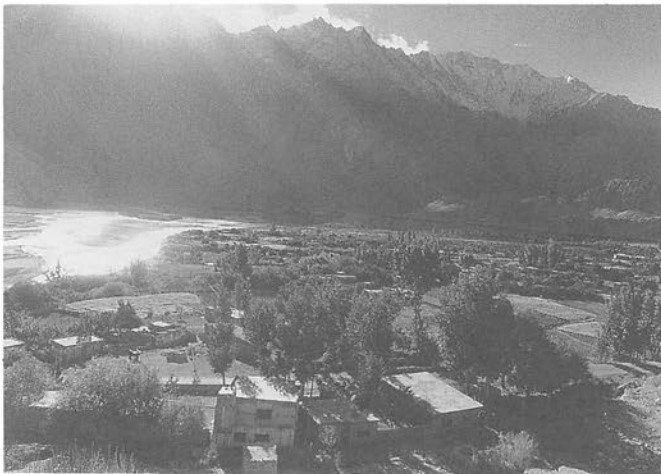


写真13 パツラ村全景  
左手はフンザ河の広い河川敷。  
大洪水の前は幅4mの深渓谷であった。



被害はなかったという。第二回目の洪水が一番大きかったという。第三回目は今から90年前に起こった。3回の大洪水の後、他へ移住していった人も少なくなかったが、残った人々はフンザ河から離れて、当時ノーボートと呼ばれていたブッシュだらけの村の高台を開拓して集落を造った。パスー氷河の融水は利用できなくなったが、幸いなことにミネラル・ウォーターである新鮮な泉が見つかって、飲料水には不自由しなくなった。その後は1994年のシンカットに出来た氷河ダムの影響もパスーまでは及ばず、1992年にカラコルムを襲った豪雨禍でもパスー村は被害にあわなかった。また、シムシャル上流の氷河はほとんどが現在大幅に後退しており、100年前のような氷河サージによる洪水の危険性はほとんどないといわれる。パスー村は開拓者のコーバ兄弟の血を受け継いで教育には大変熱心で、今から35年前に自前の学校を創立した。1986年にはバツラ氷河からの灌漑用の新水路も完成し、1987年には不十分ながら電気もつくようになった。大家族主義は今でも健在で、お互いに助け合って生きている。この小さな村に博

写真14. モハンマド・バティ・カーン (96才)



物館があって、先祖の生活ぶりを大切に保管している。宿屋も小規模のパスー・インヤツラ・インなどがあるが、規模の大きな新しいホテルの建設が進行中である。下流のフンザが観光客で満杯で、多少俗化してきている近況では、近い将来パスーがカラコルム観光の一大中心地になることが予想される。その最大の目玉はパスー氷河とバツラ氷河のように思われる。

氷河は巨大で、美しく、多くの秘密を内に秘めたロマンの世界を提供してくれる。

## 東京新聞の本

### 山の情報誌 岳人



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

#### ■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第1特集	特別企画
★1月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルに行く
2月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルトロ氷河
★3月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
4月号	アルプスの雪稜	初夏のロッキー特選コース
★5月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★6月号	私の花の名山	創刊50年 世界のアルピニストたち
★7月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢に行く
8月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
9月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局(中日新聞 東京本社) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674  
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

インド(3)

# ガンゴトリを巡る(2)

阿部 淳

(1)インドでの土砂崩れ

●ミセス・ヤダヴー警部

7/22. 朝早くジョシマートを出てケダルナートへ向かう。1時間、タンクローリーとワゴン車が接触したまま道路を塞いでいて通れない。興奮したドライバーをよそに、ヤジ馬があちこちで輪になって議論を交わしている。こんな時、わが運チャンはオピニオン・リーダーで、大方は聞き手にまわされる。パキスタンでのように殴り合いにはならず、1時間もすると交通ポリスが来て一件落着、後はポリス任せらしい。

9:30. カウサニーからの分岐カランプラヤグの手前で、100台を超える車と人の長い列、昨夜の大規模な土砂崩れで通れないと言う。バス客や急ぎの人は崩れ落ちて引掛かっている大岩盤の上や下を、荷物を担ぎ手を引いて渡って行く。こちらはヤジ馬を決め込むが、補修も情報もなく何時に通れるのかも判らない。待機組は道端の茶店の小川で子供の体を洗ったり、洗濯物を車の上一杯に並べたり、わがコック君はロードサイド・レストランを開陳して、ランチを周辺の人達に振る舞う。みな運命に身を任せていると見え、だれも怒ったり慌てたりはしない。

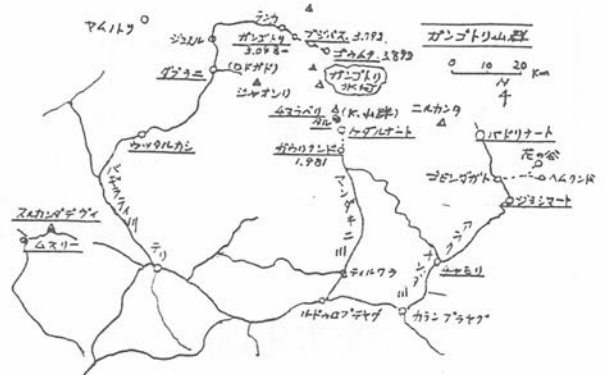
ややしてコック君が“あ、ITBPだ”と言って走って行った。一緒に戻ってきたのはサントシュ・ヤダヴーだった。3月にデリーのフカム・シンさんの自宅に呼ばれた時にも会っていた〔エヴェレストに2度の登頂を果たしたITBP(インド・チベット国境警察)の女性警部でH A Jに友人も多い〕。ITBPのジブシー・キャンプ(訓練の一つ)でガンガリアの奥の山でトレーニングをしてきたと言う。30人ほどの山岳隊の幹部の1人で、先を急ぎ、歩いて崩壊現場を渡るとのこと。この春、日本へ行けたことを楽しみに話していた。

●わいわい復旧作業

モンスーンの35°は蒸し暑く、シャツの中を汗

が流れる。屋過ぎにやっと工事人が到着、その1時間半後にハッパが始まる。ヤジ馬が取囲み、“やるぞ”の声で一斉に四散し、指を耳に当てがって見物する。一回に4~5発、2~300m離れていても地響きが伝わり、モクモクと煙りが拡がる。縄を張ったり制止する係などはない。すべて自分の責任である。砕けた岩を、人夫もヤジ馬も一緒になりハンマーや棒や素手で、力を合わせて谷へ突き落とす。わがドライバー君はここでも一番前に進み出て奮闘する協力者だ。人力の限界がくると再びハッパの出番となる。

ポケーッと見ている時“日本人デスカ”と声をかけて来たインド人がいた。昨日ヘムクンドの下りでボクを見たと言う。日本に留学した事があると言うこの紳士は「今日は終わらないから早く宿を探したほうがいい、遅くなると皆一杯になるから。40km戻ると良いホテルがあるよ」と教えてくれた。夕方、引き返す。途中、待っている車の長い列は4~500台ではきかない。途中ゲスト・ハウスに寄ったが案の定満室、1時間戻り、教えられたチャモリ(ピパルコティ)の“ホテル・パドリナート”には幸い空室があった。しかし、英語を話せる人がおらず苦勞する。550Rs(=¥1,500)と高いがA/Cが心地よい。まずはボーイと部屋の蚊退治に大奮闘、その後のシャワーと南インド料理&水割りに満足した。



朝9:30ドライバーが、小型車だけ通れると言うので出発。一度通れても、一雨来たらまた崩れる、と言うから早く抜きたい。1時間で現場。まだ作業中でハッパが続いているが、今日はブルドーザーが活躍していて断然早い。だがあの大きな傾いた岩盤は引っ掛かった儘で、その横を辛うじて通れるように土砂を除けている。1時間半でOK、対面の車が先で、まずトラックが通ると見物人から喚声と拍手が起きる。30分で我々の車、“岩が落ちないように…”と思わずに祈っていた。

## (2)聖地ケダルナート

### ●ケダルナートの夜

チャモリからガウリクンドへ抜ける近道があるが、狭い上には今は雨で数カ所がブロックされると言うので、ルドゥロプラヤグからマンダキニ川を北上する。小雨で何も見えない。途中に何か所か宿泊施設の多い村があり、ソンプラヤグには国のレストハウスもある。ここから山道の感じとなり、分岐から2時間半で車道の終点ガウリクンド(1,981m)に着く。聖地への門前町だけあって、バス・車やミュウ(ドンキー)と店が広場にひきしめあっている。ドシャブリの雨の中、汚水流れる狭い石段をレストハウスまで登る。250Rs(¥660)。

翌7/24、ケダルナート(3,584m)まで1,600mの登りである。早朝の雨の止んだ7:30、コックを連れて出発。ここはヘムクンドとは逆に人は少なく、多くはミュウで登り抜けて行く。シク教徒の巡礼とは違って行楽ムードは乏しく、歩いて登る人が思い詰めて貧しそうに見える(偏見であろうか)。ここにはミュウ公害がないのが嬉しい。やがてガウリクンド氷河に続いて静かなケダルナートの町が見える。淡々とあっけなく着いた感じで、13:30街の入り口のレストハウスに入る。トイレ別棟のドミトリーだけだが、シーズン・オフとて3ベット4人用を100Rs(¥265)で占める。

一面の霧で“山は見えなくても来ただけ良さ”と覚悟したが、夕方トイレに出ると雲が流れており、やがて雲が切れてピークが覗き出す。こんな間近に、岩と氷の誘惑的なヒマラヤ連山があったとは!昨日からの雨で諦めていただけに、もうこれで満足だった。その夜、美しい満天の星空に

## ▼インドのランド・スライド



黒い山影が写った。冷たい夜露の中で時間を忘れ、恍惚の時に酔った。

### ●静かなチョラバリ湖

周辺には幾つかの氷河湖がある。翌日、バスキ・タル(湖)は一日往復なのでやめ、山の麗のチョラバリ・タル(ガンジースロワル)へコックと出かける。朝から、ケダルナート山群が目前に競り上がり、幾筋もの氷河が眩しく輝く。街とは離れ、ケダルナート・サンクチュアリーを4km北へ、チョラバリ氷河に向かって登る。左奥からバルテクンタ(6578)、ケダルナート(6940)、カルチャクンド(6617)の手前にハヌマントップ(5316)スウェトバルパート(4898)ドウラギリ(4843)が猛々しく迫っている。その背後(北面)は、ガンゴトリ氷河である。すぐ向こう側だ。1時間半、雲が流れてきたので急いで前の丘に駆け上がって見下ろすと、お〜、あった!それはもう、清らかで、静かで、美しい湖だった。氷河の脚が湖中に落ち込み、ケダルナートの山影と裾の緑が湖面一杯に映えていた。これは紛れもなく、シヴァ神の創造湖だ。生涯、脳裏から去ることはなからう。ケダルナートへ来て報われた思いがする。水辺にどの位座っていたらろうか、山おろしの冷たい風が体に沁みてきたので、おいとまにする。

帰りは寺院に寄り、マーケットを歩いて宿に戻る。その夜、心地よい眠りが訪れた。

7/26、ガウリクンドの広場へ降りて出発の用意をしていると、レストハウスのマネジャーが忘れた老眼鏡を届けにきてくれた。高い品なので多謝、有難い。マンダキニ川の下りで背後を振り向くと、朝日に輝く美しいケダルナート山群が見送っ

てくれていた。そして前方の雲が上がりだすとトリスル山群のシルエットが遠望され、やがて一際高いナンダ・デヴィが姿を現した。さすがインドきっての名峰だけのことはある。大きい！

### (3)聖地ガンゴトリ

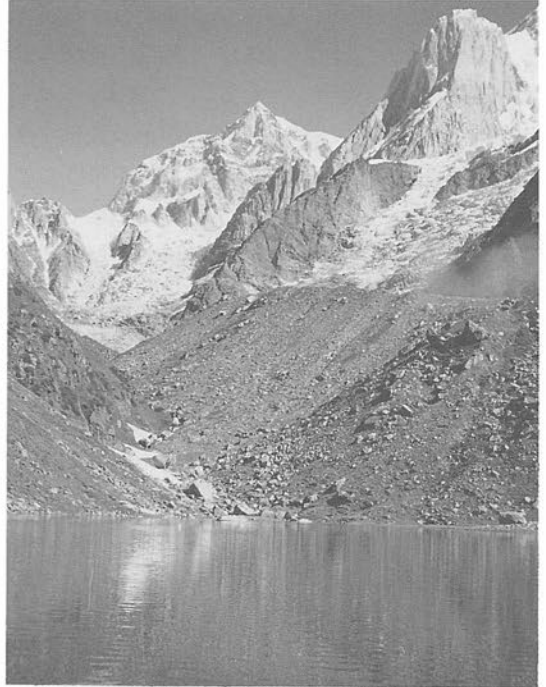
#### ●懐かしいウツタルカシ

アラクナンダ川まで下りずに、手前のティルワラから西へ、ガンシャリ〜テリへ向かう。道は狭く時折悪いが、車が少なく何よりもシ・グリーンナリーの山面の農村が清々しく美しい。テリからバギラティ川沿いに進む。午後になると暑く湿っぽくて酷い！エアコン・カーなのにベルトが合わないために利かないのだ。出発以来ドライバーに調達するよう言ったのだが、修理屋に行ってもいつも“ない”で済ませていた。この運ちゃんはクーラーが嫌いな事を知ってはいた。遂に“ミセス・クマールに既にA/C代を払っている。最初から今迄オベレイトしないのは君の責任だぞ！”と宣言した。当り前の事だ。すると“すぐ治します、出来るだけ早く”と言う。結局は古いベルトを詰める補修をただけだが、インドでは当り前のことだ。ガンガリアでは我々がケダルナートに行っている間に、車の荷台のブリキ箱に入れてあったコックのウールの衣料など数枚が盗まれたと言う。運ちゃんが鍵を開けて食料を取り出し、その儘にして博打に興じていたらしいが、本当にそうなのかどうか。博打に負けた払いかも知れない、とも言っていた。これはシカール・トラベルが弁償することにした。我々の契約関係が仲良し関係にすり替えられて甘くなっていた事も確かなので、主従関係を建て直し、ドライバーの言動をキチンと管理確認する事にした。

ウツタルカシではプライベート・ホテルにも寄ってみたが結局政府のツーリスト・バンガロウ (236 Rs=¥630) にする。ここは3度目である。'87年にはジャオンリ追悼パーティーで10人で泊ったが、いささかも変っていない。2Fの同じ部屋にする。ここはコックの居住エリアである。ウイスキーとビールを手に入れ、ドライバーも加えて3人でコック君の里帰りを祝う。懐かしく、おいしかった。

#### ●ガンゴトリへ

### ▼ケダルナートのチョラバリ湖



この一帯は'91.11に大規模な地震に見舞われた地域で、大きな橋が落ち、至る所に土砂崩れがあるが、マネリ〜サンの間崩壊は恒常化しておりブルドーザーが作業中だった。マッラから先の崖も何時何処から崩壊してもおかしくない難所で、緊張する。中野孝次の「神々の谷」にある辺りであろうか。コックは、家がこの地震で倒された時、クマールさん(シカール・トラベル社)に援助され助けられた事を一生忘れない、と手を合わせて感謝していた。

ダブラニは意外に近かった。ジャオンリBCへ至るロード・ガド(沢)の分岐でストップ。当時BCまで入ってジャオンリを一目見て追悼を捧げたいと思っていたのだが往復5日かかる上に、この春に韓国隊と入ったITBPのヤダヴァーさん達の話では“すごく荒れていて崖のトラバースが厄介、特に今は雨季で崩れているから大変”との事なので諦めた。亡き彼女らを偲んで黙祷する。少し先にはヒンドゥの祠があり、バギラティ川を渡る吊籠の“渡し”があった。川の難所なのだろう。

11:30、ジョスゥルのパッティで彼等の朝食。ここはコックの村で家はこのずーっと山手にあると言う。持参の卵のオムレツを沢山作って貰った。この先、東へ30分も行くとランカの要所である。

かつて車道の終点であったが、今は中国国境に対する軍の防衛上、橋が出来た。谷を見下ろすと恐ろしく狭く険しい。すぐ先で正面の雲の中に大きい山が現れる。'84年に北大山岳部の工藤君（'85、H A J ガンケル・ブンズム隊員）達が登ったスーダルシャン（6,507m）だ。やがてガンゴトリ村（3,148m）ウツタルカシから僅か4時間半であった。やっと来れたガンゴトリ！さすが、ガンガ一番の巡礼の聖地である。沢山のアシュラムや宿泊所があり、道脇には、バスやクルマ、ババさん（サドウ）達のムシロ・テントや露天が並ぶ。バギラティ川はここで凄まじい轟々たる崖となって抜け落ちて行く。その側のツーリスト・バンガローに泊る（350Rs=¥930）。コックが早速作ってくれたベジ・パコラと水割りりで到着を祝う。

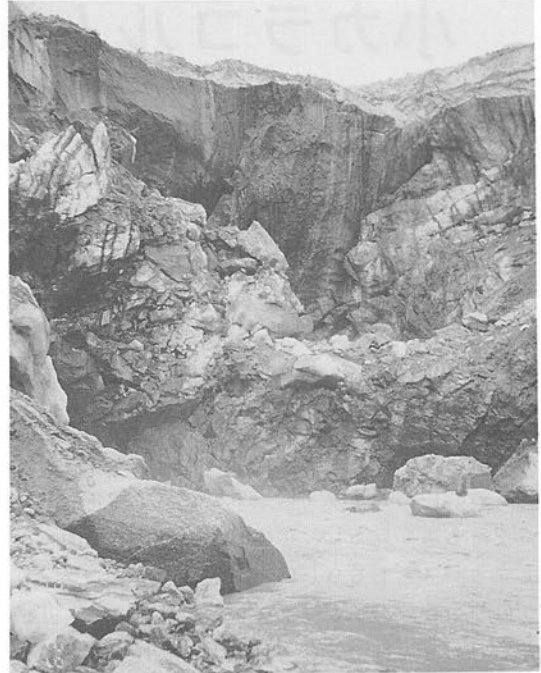
#### ●氷河の舌端・ゴウムク

ここから、コックとキッチンボーイとポーターの4人の歩きとなる。ミューで上がるインド人3人もチルバスの茶屋泊りで、あとは西洋人カップルと我々だけとなる。昼過ぎにはもうブジバス（3,792m）へ着いてしまった。レストハウス（160Rs=¥430）に泊る。ここは、あと小さな寺院と巡礼宿とババさんのテントがあるだけの、中継地である。霧雨が小雨に変わり、ひどく寒いがポーターは現れず汗が冷えて夕方風邪をひく。夜、雲間から星が見え明日への期待が膨らむ。

翌7/29、コックと6時に出る。ババさんと我々だけだ。ややして右手の雲の上からシブリン（6,543）のピークが姿を見せて感激する。さすが鋭峰である。続いて正面にバギラティⅡ・Ⅲ（6,510m）が現れ、リードしてくれる。7:30、ゴウムク（牛口；3,892m）に着く。掘って建て小屋（パッティ）とババさんのムシロ小屋と西欧人のテントが一張りだけ。ここはガンゴトリ氷河の舌端で、その氷河の洞穴が、聖なるガンガの川を滔々と吐きだしている。氷の大きなブロックがあちこち散在し、川べりの石も凍っていて、口元には近付けない。

とうとうゴウムクへ来た。ガンゴトリの奥の山群を見るには、この氷河の上をあと7～8キロ奥へ行かなければならない。今はここまでだ。そして3月から始めた“流れ旅”の歩きも、これでフィ

#### ▼氷河の口、ゴウムク



ニッシュとなる。写真を撮り、石をたくさん拾う。感傷はなく、終わった清々しさがあった。これまで自分に課していた義務と責任から開放された、充実した自由があった。あとは余韻を味わうだけでよい軽さが、心地よさを誘う。

幾度か振り返りつつも、ガンゴトリ村へ戻る。露店でガンガ・パニの小壺を買って封印してもらい、2:30、ウツタルカシへ向かい、4時間で着く。靴の泥を落としながら、“よく働いたなあ”と思わず褒めてやる。

翌朝、ムスリーに向かい、2時間でスルカダ・デヴィ（3,030m）の登り口。だが曇天が雨となるや、たちまちドシャ降りとなって登るのはヤメにした。'87年以来で、登り口にはゲートができ、1軒しかなかった茶店が8軒並んだ。丘の上のラマ寺へお参りする人が増えたのであろうか。12時半ムスリー。時間が浮いたのでデリーに直行、17時着。コンノートのセンター・ポイント・ホテルには幸い空室があった。あ～、きれいだ！

# 小カラコルムからパミールへ(2)

—— ディラン (7,257m)、ムスターグ・アタ (7,546m) 連続登頂 ——

岩崎 洋

未だ夜の冷気が残るギルギットを後にして、バグロット谷へ向う。我々は2人しか居ないので、2台に分乗する。此の国ではまさかと思っている事がよく現実に起きるので、用心にこした事はない。谷底に落ちてゴミになっているジープやトラクターもよく見るし、年に数回インダスに消えてしまうバスもあるらしい。

昨年は我々のチャーターしたワゴンのキャリアがローリー峠の下りで本体ごと滑り落ち、わずかの差で山側に落ちたからよかったようなものの、あやうく登山自体が中止になる所であった。

★

やがてジープはバグロットの谷へ入って徐々に高度を上げていく。鈴木車はかなり前を走っており、谷筋に落ちる尾根に見え隠れしている。と、その時、荷物と共に乗っていた私の車はにぶい音をたて、直ぐにガタガタと風景が揺れだした。

ドライバーは冷静に車を山側に寄せて止めたので降りて見ると、ツルツルのタイヤは無残にバーストしていた。先行車はすでに視界に無く、ドライバーに早くタイヤを替えようと言うとジャッキが無いと言う。暫し呆然。怒る気にもなれず、「どうするんだ」と聞くと「ノープロブレム」(問題無い)とすました顔で言う。一服すると彼はバーストしたタイヤの後に石を積み重ね、その上に車を乗り上げさせ、大きく傾いた車の内側にさらに大きな石を滑り込ませ外側の石を崩す。そうすると不安定だが、タイヤは宙に浮き、カラカラ回り出した。そうして無言の儘ナットを外して行く。その間約20分。ヒマラヤ諸国ではよく色々な事が起きるが、大概の事はなんとかなってしまう。インシアラーなのだ。

★

チラ村はバグロット谷左岸にあるのどかな美しい村である。本流の右岸直ぐ近くまでヒナルチェ氷河がせまっており、標高2000m台にあるとは思えぬ程舌端がグチャグチャになっている。本谷は思ったより開けていて遠くにはプーパラッシュ辺りと思われる山々が聳えている。

後で知ったのだが、対岸にあるブルチェ村からもヒナルチェ氷河に入る道があり、我々のベースキャンプであるヒナルチェもブルチェ村の所有であるらしい。ベースで彼らから道の通行料と幕場代を請求され一悶着あったのだが、これはポーターにチラ村の人達を使ったせいで、帰りにはブルチェ村の人達にポーターを頼むと言う事で無事に納まった。

★

ロードヘッドでポーターを集め、賃金の交渉をするが、すでにスペイン隊が入山しており1000ルピー ('96.6月 US1\$≒37ルピー) 払ったとか、800ルピーだったとか、人によって言う事がまったく違うので、なかなか交渉にならない。事前にバグロットのポーター賃金は高いと聞いていたがあまりの高さに、少し感情的になってしまう。ヒナルチェのベースキャンプは一日で行ける距離なのだ。ポーターの行程で2ポロだとしても高すぎる。2時間近く「もう少し安くならない?」「1000ルピーでなければ行かない」と不毛な時が過ぎ、決まったのは前の隊より安く行く事は不可能に近いと言う法則通り、ベースに着いたらスペイン隊が払ったのと同額を支払うと言うものだった。

話が決まれば仕事は速く、ポーターのアンダーテキングを作成し、荷物を渡す。ポーターは7人、[サルダール(ポーター頭)は雇っていない]鈴木はポーターよりも背負っての出発である。ディ

ランカルカまではほんの数時間の道程なので、花や山の写真を撮りながらゆっくり行くが、あまりの近さに二人とも驚いてしまった。森の中の牧場といった感じの美しい所で、午後のひとときを、のんびりと過ごす。翌日はアブレーションバレーから氷河に降り、ディランと対面した。北面よりも雪が少なく下部は悪そうである。ポーター達はヒナルチェの登りに差し掛かっているのに私はモレーンの上からひたすら登路を探していた。なんと言っても我々の登れるルートを見つけなければならぬのだ、ロープ2本、ロックハーケン3本、アイスハーケン6本、スノーバー4本で降りてこられるルートを……。

★

ベースキャンプで休養後、偵察に出掛けた。一気に500m位高度をあげて、そこから幾つかのルンゼを渡りながらトラバースして行く。休養中に稜線側から来るセラックの崩壊を何度も見ていたので、ルンゼの出口を横切るのは命掛けである。一人が先に行き、その間もう一人は相手の為に念仏をとえながらセラックを見ているくらいしか出来ない。無事に行き着けばもう一人が後を追う。

途中から氷河に入り、雪崩恐さに側壁から離れてルートを取って行くが、クレバスの開いていたりして、完全に安全と思えるような所までは行けないので結構緊張の連続だが、氷河は思っていた程悪くは無く、確実に高度を上げている。

やがて目指していた尾根が目前に見えるようになったが、ルートを探る必要もない位ボロボロで、ハーケン3本では見なかった事にして先に進むしかない。氷河を一段上がり、ベースキャンプから見一番顕著に見えたルンゼの出口に続くプラトールに立つ。

プラトール上はデブリの流れが交錯しており、鈴木と40m以上離れて安全地帯を求め前進して行く。その合間に観察するとそれは今まで渡ってきたルンゼと違い、下からは見えないが西稜上6300m付近から落ちている斜面につながっているように思えた。2本の顕著な尾根の間を落ちてきているのだから、斜面の雪を集め小さな氷河になっていると思われる。すでにBCから1000m近く上がってきているのでここからは懸垂氷河にならずに稜線

に続いている可能性が強い。問題は舌端からはとも取り付ける状態ではないので、どうやって氷河上に上がるかという事だった。鈴木と右のコンタクトラインとか左からとか話している間にも小さなセラックの崩壊や岩雪崩があり、その度に可能性が打ち消されていく。

そのうち今にも大崩壊がありそうな恐怖から恐れ、小氷河に向かって右側の尾根の末端(予定していた尾根の一本先の尾根)に逃れた。そのまま尾根をつめて左に回り込んで行くと、思った通り氷河は稜線につながっており、尾根から氷河上に降りることが出来ればそのまま西稜に出られそうなのだが、この尾根もグズグズの岩ばかりで懸垂下降するのにも不安がある、まして登り返すのは論外である。この日は初日でもあるし、ルートの可能性が確かめられただけで十分ということにして、尾根の末端に荷上げた装備をデポした後ベースに引きあげた。

1日働いたら1日休み、稼働率50%が我々の目標なので翌日はゆっくり休み、尾根の末端にABCを建設したのはその翌日だった。この付近には良い幕場は無く、下のプラトール上はセラックの崩壊が恐いし尾根上も今一なのでプラトールから一段上がった所に決めたのだが、1日早くスペイン隊が2張テントを張っており、我々はその斜面の上にテントサイトを作った。

今にして思えばこれは私の判断ミスで、あやうく死んでしまうところだった。ほんの十数メートルの斜面でも、夏の日差しに曝された雪は重く、点発生した小さな雪崩が生じただけで斜面を切ったテントサイトに張っている我々は簡単に押し流されてしまう。

★

最初に偵察したルートからは氷河上に降りられないので今回はさらに上部にルートを探る。ABCから尾根を高差にして500m位つめていくと安定した雪稜があり、その先はまた岩稜になっている。それ程困難ではないが、なにしろハーケンが3本しかないのですから右のルンゼに入るが行き詰ってしまう。しかたなく引き返し左の急なルンゼを横切り不安定な雪壁をトラバースする。岩はボロボロで雪は腐っておりあまりいい気持ちのしな

い所である。さらに小尾根を回り込み小氷河側の斜面に入ることが出来た。腐った雪に難渋しながらも斜上ぎみにトラバースを続け下降点を探す。雪は雪崩れる一步手前といった感じで、とても2人一緒に歩く気がしない。これで流されたら無謀登山と言われそうな所である。下には氷河が見えているのだが降りていけそうな所はない。

真直ぐにトラバースしていけばそのまま氷河に出られるのでは、と鈴木は言うが、このトラバースをさらに数百メートル続けるのも精神衛生上あまり良くないと判断し、腐った雪が僅かに続く雪面を降ってみることにした。足元から雪は崩れていくが積雪が少ないので落ちないであろうと一方的に決めつけ、ピッケルとバイルを突きさし体重を分散して一步一步降っていく。

結局、今回の登山は技術的には全く難しい所はなく、このトラバースから氷河へ降りる所がギリギリの状況判断を要求される精神的な核心部であった。

★

下降を続けると雪壁は氷河へ落ちる垂壁に消え、そこから少しトラバースした所に我々の体重を支えてくれそうな岩を見つけた。鈴木を待つ間にルートを探る。そこからは直ぐ下に見える氷河から西稜に至るまでを望見することが出来た。氷河はデブリだらけと言うよりも雪崩の河といった感じで、そのまま西稜へ続く雪壁になっている。技術的には全く問題はなさそうであった。クレバスと両側、特に右岸から来るセラックの崩壊、雪崩が恐いが、状態さえ良ければABCから1日で西稜上に抜け出るのに理想的なルートと思われた。

鈴木と相談の結果、今居る所からロープを1本フィックスして氷河に降り、西稜下の雪壁までコンテで行くことにした。そこから上ではロープを使わない。氷河上で雪崩に遭った場合、コンテでは2人とも巻き込まれてしまう怖れはあるがクレバスも恐い。確率の問題で我々はロープを結ぶことにした。

なんとかルートも目処がついたので下降点となる岩の所に必要な装備をデポし、何回も通りたくないようなトラバースをしてA・B・Cへ降った。

★

ウィスキーを飲みながらベースキャンプで悪天をやり過ごす。やり過ごしながら考えたのは、何時登り始めようかということだった。天気が回復してからでは陽が当り、あのトラバースから氷河の登高はロシアンルーレットになってしまう。あのトラバースを夜間に行なう程我々は自分達の技術、経験を確信してはいない。色々考えるが良い考えは浮ばず、先が見えてこないまま2日が過ぎた。結局、悪天の後半、回復期に入ったところで出発すれば4日後位のアタック予定日には晴れるのではと、自分達の都合だけで計画を決めた。もちろん天気の周期はある程度決っていて、大きな崩れが今のところあまり無いということ踏まえてのことだが。

★

装備等はほとんど荷上げされているのでアタック用の食料を詰め込み早朝出発する。

A・B・Cに着くとスペイン隊のテントは雪のため潰れかけている。我々のテントは畳んで岩陰にデポしておいたので無事だった。なにしろ虎の子、一張しかない大事なテントなので気を使う。

テントサイトを整地しフライを張り終えて直ぐそれはやってきた。鈴木が「雪崩だ!!」と叫び、近くのザックをつかみ横っ飛びに走る。私も手近にあった装備をつかんで転ぶようにして後を追った。前のめりになりながらも上を見ると、スローモーションで雪面を這うように落ちてくるそれが見えた。一瞬の出来事だった。そして我々の虎の子は消えてしまった。私のミスである。あと5分遅くそれがやってきたら2人ともテントの中で冷凍マグロ状態になっていたのは間違いない。テントを傷つけないように手で掘り起しながら声もなかった。鈴木はピッケルを失い、ガソリンも見当たらない。

こうして戦かわずして一回目のアタックは終わった。 14.Dec.'96

今回持参した装備類

- ・ロープ 9mm×50m×1
- ・ダイニーマ 6mm×50m×1
- ・ロックハーケン 3
- ・アイスクリュー 3
- ・スナグ 3
- ・スノーバー 4
- ・テント 1
- ・ツェルト 1
- ・銀マット 2
- ・EPIヘッド 1
- ・カートリッジ 6



## 地域ニュース

### 《ネパール》

ラトナ・チュリ

先月既報の信州大学とネパール警察合同ラトナ・チュリ登山隊の続報が入った。

登山隊は10月8日西峰(6,550m)の頂上にC2を建設し、翌日頂上アタックを行ったが、隊員の不調と固定ロープ不足のため頂上直下50mから引き返した。14日第一次アタック隊は、田辺治登攀隊長(35)、澤田克彦(38)、アレ、ドルガ、ツルの5名が初登頂に成功。16日の第二次隊では、野村昌男総隊長(55)、渡部光則隊長(46)、花谷泰広(20)、ジョシ、ヌル、フルの6名が登頂。18日の第三次隊の金子鉄男(51)、内田健一(28)、小林茂幹(19)、シバコティ、ダンバーも登頂に成功し、日本側は全員登頂となった。

ラトナ・チュリの頂上からは、東はシシャパンマから西はダウラギリまでヒマラヤの大景観を観ることが出来た。

### 《インド》

カシミールの近況

9月に4回に分けて行われたジャム・カシミール州議会選挙で、イスラム穏健派の国民評議会が定数87名のうち57議席を占め、党首のファルク・アブドゥラ氏が7年ぶりに9代目首相に返り咲いた。アブドゥラ首相は、ヒンドゥ教指導者で中央政界にも影響力を持つカラン・シン元文化観光相を、同州の自治権を検討する政府諮問委員会の委員長に任命したとの事。カラン・シン氏は、1947年10月27日、カシミール地方をインドに併合する文書に調印した故ハリ・シンカシミール藩王の長男。調印当時は、インドとパキスタンが英領から分離独立した混乱期で、カシミールはイスラム教徒が圧倒的だったことからこの措置にパキスタンが反発し、直後に両国間の戦争に発展、今日まで紛争の絶えない地域であるだけに、イスラム

過激派組織にどう対処し、内戦で破壊された地域経済をどう復興させるのが、課題である。

(The Hindu 国際版 10/19)

## トピックス

ラッセル・ブライス氏講演会

ピープルで紹介したニュージーランドのプロガイド、ラッセル・ブライス氏の講演会が、12月11日東京で開かれ約100名が出席した。これに先立ちガイド付公募隊に参加し、チョー・オユーに登頂した田部井淳子さんから登山の様子が報告された。ラッセル・ブライス氏の目指すヒマラヤ登山のガイド付公募隊のグレードの高さについて出席者の多くが共感した。

### 第35回日山協・海外登山技術研究会

表記の研究会が以下の通りにおこなわれる。

日 時：1997年2月22日(土)～23日(日)

場 所：八王子大学セミナーハウス

八王子市柚木1987-1

Tel 0426(76)8511

参加費：10,000円(宿泊・食事・資料)

懇親会費は別途3,000円

申し込：所定の申込用紙に記入の上、2月8日までに参加費を添えて下記まで。

〒150-50 渋谷区神南1-1-1岸記念体育館内

日本山岳協会 国際部海外委員会

Tel 03-3481-2396 Fax 03-3481-2395

内 容「ヒマラヤン・ソロクライミング」

「超経済的登山を語る。」

「海外登山報告」「海外最新情報」

## Books

神々の座を越えて

谷甲州氏のヒマラヤ周辺を舞台にした大冒険小説がまた出た。「遥かなりヒマラヤ」の続編とも言える本である。前著もネパールやヒマラヤを知らないとは絶対に書けない小説だ、とカトマンズの街角やヒマラヤを思い出しながら、興奮し一気に

読んだ記憶がある。

本書は甲州氏ならではの筆で、地政学の、地理の、歴史の、登山などの知識を十二分に駆使しての大スペクトルである。山を登っているだけでは書けない本だ。

最後に88年の三国合同登山でエヴェレストをチベットからネパールへ縦走し、下山して来た山田昇が実名で出て、カトマンズで会うシーンがある。甲州氏も山田も知っている我々としては、あとがきにもあるがカンチ仲間の山田への想いが伝わって来てうれしい。

本書が氏の何十冊目の作品だかは知らないが、青年海外協力隊員時に、本当に仕事をしていたのだろうか？と思ってしまう。でも面白かった。次回作をまた期待しよう。(八木原)

ハヤカワ・ミステリワールド 早川書房  
446頁 2000円

### カンチェンジュンガ(8,586m) 無酸素登山報告書

1995年秋、ガイア・アルパインクラブ隊(小西浩文隊長ら4名)が南西面からO<sub>2</sub>レスで挑んだ記録である。

それぞれがこの登山から得た教訓が語られていて、現在の若手クライマー達が、何を考えて山に挑んでいるかを知ることが出来る。15年前にこの山で縦走を目指した山田昇や藤倉和美達が、彼らのような言葉を使って自分を語ることが出来たのだろうか？とフト思った。時代はこのように変化している。同じように「山」も同じ場所にはあるのだが確実に変っている筈だと思う。

常々思うのだが、O<sub>2</sub>レスやアルパイン・スタイルを目指す登山家には、是非、他隊のいない山、時期を選んでもらいたいものだ。そのような条件の中でこそ、ハンディ・キャップが存在し、そこにこそ意義がある筈であるからだ。

パルスオキシメーターの報告や、BCまでのアクセスなど参考になるデータがシンプルにまとめられている。

A4判 56頁

〒145 大田区西嶺町30-10 小西浩文方

## ヒマラヤから

### チュルー便り

私達チュルー登山隊は、無事カトマンズに戻って来ました。チュルーには4つの6,000m峰があります。私達はその内のピラミダルの美しいチュルー6,400mを目指しました。(片岡邦夫さんの言うチュルー西峰、THE TREKKING PEAKS OF NEPALのチュルー東峰) 予定していたジョムソンからのトロンパス、ティリッツオ峠越えは雪深く、ポーターを抱えての峠越えは不安が多いので、マルシャンディのルートを取り7日間でオムディ、その後カジェカ・コーラに入り4,800m地点にBC。ここから過去の写真だとモレーン上を行くのですが、雪で真っ白に覆われていて大変なラッセルのアルバイトを強いられました。何とかACを建設しましたが、そこからTOPまでは非常に長い。

11月14日、大寝坊して私とペンバ・ツェリンでアタック。約8時間の死闘の結果登頂。マナスル三山、ペリ・ヒマール、ダモダール・ヒマール、アンナプルナ、ダウラギリと大パノラマを堪能しました。

パートナーの後輩は初めての高所で力が出せずAC止まりとなってしまいました。

1996,11,25 カトマンズにて 野沢井 歩

### 東京集会のお知らせ

日時 1月27日(月)午後7時  
新年会とします。  
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)  
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

■財政支援：尾形好雄 10万円、中川裕、岩崎洋、鈴木正典 各45,000円 桑川章 12,000円

## インド・ヒマラヤ登山申請1997年

11月下旬の情報によると、1997年からインド・ヒマラヤ登山申請内容に若干の変更事項が生じる他、登山料が値上げとなる。

従来、その手続きの簡単さ故、人気の高かったインド・ヒマラヤであるが、ここ2～3年、登山隊隊荷の別送方法の変更やトレッキング・ピーク登山隊への登山ヴィザの義務付けなど、煩わしさが増してきている。

環境保護費や登山予約取消料などの様に、時代を反映した条項も盛り込まれている反面、トレッキング・ピーク登山隊への登山ヴィザの義務付けや、有事の際のヘリコプターを始めとする救援隊や捜索隊の出動費用を賄うための保険加入の要請などは、無届の入山者を把握出来ないが為に有事の際スムーズに事後処理ができなかったり、再三の請求にもかかわらず、事故処理費用未払いの登山隊があったりと、インド・ヒマラヤを訪れた日本隊を含む過去の登山隊の責任もかなり大きいものと思われる。

詳細は1月12日に開催するインド・ヒマラヤ会議の資料に掲載する予定であるが、取り急ぎ変更並びに追加、改定された登山料、再三に渡る注意事項等を抜粋掲載する。

### 申 請

- 1.申請する山名及び位置（経度並びに緯度）。（希望する山が既に他隊に予約されている場合、代替の山を提案する。注：競合する場合を考慮して、第二希望、第三希望も併記しておいた方が良い。）
- 2.希望する山のアプローチ並びに登山予定ルートが明確に表示されたルート図を7枚添付の事。ルート図を添付せずに申請した場合は受け付けない。尚、アルナチャル・プラデシュやシッキムの山を申請する場合は、8枚添付する事。
3. i) 遠征期間  
ii) インド入国予定日並びに日程概略及び出国までの全期間を明記した予定表を7枚添付の事。尚、アルナチャル・プラデシュやシッキムの山を申請する場合は、8枚添付する事。  
iii) B CからB Cまでの実登山活動期間を明記

の事。

4. i) 別紙 'A' の形式に添った隊長並びに隊員のメンバーリスト7枚と各隊員のパスポートサイズの写真一葉を添付の事。

ii) 自国で加入した救援者費用をカバーする保険の詳細。有事の際の救助活動や捜索活動に要する救援者費用（IMFへ最高額20万ルピーまでの支払を保証する旨を明記した）をカバーする保険に加入する事。

5.登山隊の派遣母体名

6.出国前に、登山隊にツーリストヴィザではなく登山用のXヴィザを確実に発給するために、最寄りのインド大使館もしくは領事館名と住所及びファックス番号を明記の事。

7.無線機やGPS、雪崩ビーコン等をインド国内に持ち込むか否か。この内、無線機を持ち込む場合には、正副2通の申請書に記入の上、添付の事。持ち込み無線機は申請された周波数の物である事。

8.登山隊への天気予報は必要か否か。

9.インド国内へ持ち込む登山用具や衣類、食料等の全隊荷について、消耗品と非消耗品とに分け、おおよその重量並びにCIF価格（注：輸送運賃や保険料等の諸経費を加えた価格）を記載の明細リスト2通を添付の事。このリストは登山隊が発する1か月前には届いている事。

### 注意事項

- 1.インド入国予定日より少なくとも4か月前までに必要書類がIMFに届いていれば、スムーズに手続きが進む。しかし、少なくとも3か月前までに入国する空港名や港名、隊員名、隊員のパスポート番号等の連絡が届いていない場合、登山用のXヴィザの発給が送れ、自国若しくはニューデリーで待機せざるを得なくなる事もある。
- 2.～4.省略
- 5.一部省略（連絡官関係）  
登山隊の荷物はIMF気付登山隊隊長名とする。荷物の中に酒類、たばこ類をいれる事は禁止する。
- 6.最終行政地区では、連絡官は然るべき責任者との打合せをする事。ポーターと直接雇用交渉や契

約をしない事。該当地区の責任者が規定料金でのポーター雇用に尽力する。

7.登山隊からの申請があり次第、IMFは申請のあった山の仮許可を出し、登山隊にその旨連絡する。(インド政府からの登山許可が必要であるため、IMFとしては申請時に申請書や添付書類を完璧な状態で提出したい。)仮許可の連絡が着き次第、登山料と本申請書類一式を送付の事。

### 新 登 山 料

6500m以下の山	\$ 1500	左記は12人までの 料金 13~16人ま での追加料金は 1人に付き\$300
6501m~7000mの山	\$ 2000	
7001m以上の山	\$ 3000	
制限地域の山	\$ 4000	
東部カラコルムの山	\$ 4000	(インドとの合同隊に限る。外国人隊員数は8人を超えてはならない。隊員数は一隊最多16人まで。)

※尚、これまでカンチェンジュンガを始めとするシッキムの山々やヌンヤクン、6001~6500m峰それにトレッキング・ピークも別料金を設定されていたが、この度の通達の中には記載されておらず、現在問い合わせ中である。

### 環境保護費

一隊に付き1000ドルの環境保護費をデポジットすること。この金員は登山終了後、連絡官が登山隊が環境保護をした事を証明する事によって返却される。また、一隊に付き300ドルの環境税を徴収する。

8.登山料はバンク・ドラフトに限定し、小切手での送金は受け付けない。送付先は銀行やエージェントではなく、IMFである。

9. IMFからの登山許可内諾の連絡から2か月以内に登山料を支払わない場合には、仮許可は次に予約している登山隊へ移行する。なお、登山隊の側から登山を取り消す場合、登山料の25%を支払う事。

10.なんらかの事情により登山許可を取り消した場合には、登山料は全額返却する。

11.省略

12.高所順応のためであっても、いかなるピークにも無許可で登ってはいけない。

13.省略

14.登山隊がニューデリーを出発した後に如何なる時点で如何なる理由で遠征を中止しても、登山料は返却しない。また、その場合でも速やかにIMFへの報告はすること。

15.省略

16.省略

17.登山中の事故に際しては、通常ヘリコプターにて最寄りの病院に収容される。ヘリコプターの出動費用は、その飛行時間等により算出されるが、一回の出動で3万5千ルピー若しくはそれ以上要する。それ故、有事の際の費用をカバーする保険をかける事を奨める。

18.登山終了後には、写真やルート図を添付した詳細な報告書をIMFに提出する事。とくにポーター雇に関する事では、雇人数や日当、雇用に際しての問題点などを明記する事。

19.デリーでの政府役所関係の休日に注意の事。祝日それに土・日曜日は休日である。

20. IMFは祝日の他、日曜日と第二土曜日は業務を行わない。IMFへの訪問時間は、業務日の午後2時から4時の間である。従って、ブリーフィングやデ・ブリーフィングも、基本的にはこの時間帯に行われる。ブリーフィングやデ・ブリーフィングがスムーズに行われる様、事前に電話連絡して、IMFの担当者若しくは事務局長にアポイントメントしておく事。

### そ の 他

1. IMFでの宿泊施設はドミトリー形式で、25名程の宿泊が可能である。料金は一人8ドル。

2.インド政府からの許可を取得するには6週間を要するため、後日の行程の変更、メンバーの追加や変更は本来の登山許可日程に支障を来すため、出来ない。しかし、メンバーの削減はかまわない。

3.登山隊は、有事の際の救助活動や捜索活動に要する救援者費用(IMFへ最高額20万ルピーまでの支払を保証する旨を明記した)をカバーする保険に加入する事。

# ネパール・ヒマラヤの概要

## はじめに

ネパール・ヒマラヤは世界最高峰サガルマータ(エヴェレスト)をはじめ8000m峰14座中実に8座を有する。ヒマラヤ山脈中の中心に位置する、まさにヒマラヤ王国ともいえる。

ネパールは小さい国土を山と深い谷に覆われている。そのため山へのアプローチとしての交通事情は他のヒマラヤ諸国と比べあまり良くない。しかし最近ヘリコプターの普及によりぐっとアプローチが楽になってきている。

93年度から従来の春、秋、冬の三季制から夏も解禁されたが、夏季はモンスーンの影響を受けるためその前後、春季(プレ) 秋季(ポスト)が一般的な登山シーズンとされている。最近は秋季に登山隊が集中している。

この様に一般的には日本人にとっては休暇の取りづらい季節に日数の掛かるアプローチを経ての登山となる。

それでも一向に衰えないネパール登山の人気ですが、近年日本の経済発展、円高などの恩恵を受けむしろ誰でも手軽にネパール登山を楽しめる時代になったと言える。

しかし、最近の傾向としては、日本隊に限らず登山隊の人気も、8000m峰とプロモ・リ、アマダブラムなど形の良い山に集中しているのが現状である。

その他、エスクベディションだけでなく、簡略な手続きで登れるトレッキング・ピーク登山やトレッキングも非常に盛んに行われている。

ネパールでの登山が他のエリアと比べ特筆すべき事は、その長いヒマラヤ登山の歴史に培われたネパール雇用人(シェルパ)の活躍だろう。BCまでの隊荷の輸送に欠かせないローカル・ポーターの充実。日本食まで作ってしまうコックをはじめとするキッチンスタッフ。ハイキャンプへの荷上げから、ルート工作までこなしてしまうハイポーター(シェルパ)は登山の成否を左右するほどの

存在となっている。しかしあまりにも彼等に頼りすぎて登山本来の楽しみを失っている感も拭えない。

比較的情報も多く、現地エージェントの充実など登山隊の受け入れ体制が整っているネパールであるが、国内での推薦状取得、許可申請手続きから現地での渉外活動と色々とクリアーしていかなければならない。私自身の渉外体験から、特に初めてネパール登山を志す人のための手引き書としてまとめてみることにした。尚、ネパールも他のヒマラヤ諸国同様、諸手続き、レギュレーションなどはめまぐるしく変化している。その事を念頭において手続きを進める事が肝要である。

## ネパール・ヒマラヤの概要

ネパール・ヒマラヤは東西約800kmに伸びている山脈である。当然ながら東のカンチェンジュンガ山群と西のアピ、サイパル山群では気候条件も大きく異なってくる。

大別すると東部のコシ地区、中部のガンダキ地区、西部のカルナリ地区とその水系により3つの地区に分類することができる。さらに現在一般的に登山を目的とした分類では、カンチェンジュンガ山群、クンブー山群、ロールワリン山群、ランタン、ジュガール山群、ガネッシュ山群、アンナプルナ山群、ダウラギリ山群、カンジロバ山群、アピ・サイパル山群と分けられている。しかしこれも便宜上のことで、さらに細分化することもできるがその山群、および周辺地域といった分類として概要を述べてみたい。

### ■カンチェンジュンガ山群

ネパールの東北端、インド・シッキム、中国・チベットとの国境沿いに広がる山群で、世界第三位のカンチェンジュンガ主峰を始め、同南峰、中央峰、ヤルン・カンの8000m峰。カンパチェン、クンバカルナ(ジャヌー)、ジンミゲラ・チュリなどが許可峰となっている。

古くはシッキムのダージリンからのアプローチ

だったが、その後ネパールのダーランバザールからとなったが、現在ゴベータル、タプレジェン近くまで道路も伸び多少短くなったとはいえそれでも長いキャラバンとなる。'95年カンチ・ガイア隊がチャーターヘリを利用してタプレジェンまでのアプローチに利用している。

#### ■クーンブ山群

世界最高峰サガルマータを有する、ネパール・ヒマラヤの中心的山群である。その他マカルー、ローツェ、チョー・オユーなどの8000m峰。ヌブツェ、プロ・リ、アマダムラム、カンテガ、タムセルクなど名峰、秀峰も多く毎年多くの登山隊で賑わっている。又その最高峰や多くの名峰を間近に見るためのトレッキングも盛んで、トレッカーのためのロッジやポーター事情も良く、その玄関口であるルクラ、シャンボチュエへのフライトも充実している。

マカルーエリアはアルン川沿いの長いキャラバンとなる。

#### ■ロルワーリン山群

テシ・ラプツァ峠越えのトレッキングなどで有名な山群で、東のクーンブ山群との境をなすドゥド・コシとその支流のポータ・コシ、西のポータ・コシにはさまれた山群である。二つの7000mの名峰、ガウリ・サンカール、メンルンツェ（中国領チベット）である。ヌンブル、カータン、カリョルン、ドーナ・リなどが許可峰となっている。トレッキング・ピークのバルチャモ、コンデ・リ以外隣のクーンブ山群と比べあまり登山隊が入らない静かなエリアである。

#### ■ランタン、ジュガール山群

ティルマンによって世界一美しい谷と紹介され有名になった。またカトマンズから最も近い距離にあり市内からもその一部を遠望できる。しかしこの山群は中国領チベットと接し、主要な山は合同隊による許可峰が多い。

この山群唯一の8000m峰ゴサインタン（シシャパンマ）は中国領となるため、ランタン・リルン、ランタン・リ、などの7000m峰、ガンチェンポ、ドルジェ・ラクパ、ランシサ・リ、ウルキンマンなどの6000m峰が許可峰となっている。

#### ■ガネッシュ山群

ランタン山群とマナスル山群の間にある。主峰のガネッシュ I 峰を始め、II 峰（ラプサン・カルポ）、III 峰（サラサンゴ）、IV 峰（パピール）などの7000m峰が許可峰となっている。

アプローチは主峰の初登ルート、チリメコーラ～サンジン氷河は国境変更のため入域できなくなったため、トロ・ゴンバ氷河、ヤク・コーラ、アング・コーラなどからのアプローチとなる。

その山群の北西にはスリング・ヒマールがありチャマール（7187m）が許可峰となっている。

#### ■マナスル山群

東はブリガンダキ；西はマルシャンディに囲まれた山群で、8000m峰のマナスルを始め、ピーク29、ヒマルチュリ、いわゆるマナスル三山すべて日本隊が初登を果たし馴染みの深い山群といえる。

最近、マナスルはBCまでヘリコプターを利用している隊もある。

その山群の北西にはベリ・ヒマール山群がありヒムルン・ヒマール、ネムジュン、ギャジカンなどの7000m峰が許可峰となっている。

#### ■アンナプルナ山群

クーンブ山群と並んで非常に人気の高い山群でその主峰アンナプルナ I は人類初の8000m峰登頂で有名。その他II 峰、III 峰、IV 峰、南峰、ガンガブルナ、ニルギリ、ティリツォ・ピークなどの7000m峰がある。起点となるポカラからは屏風のようなアンナプルナ連山を望む事が出来る。許可峰ではないがそのポカラからも望むことのできる名峰マチャプチャレは有名である。

またポカラを起点としたアンナプルナ周遊や内院へのトレッキングも人気があり大勢のトレッカーで賑わっている。

山群の北にはダモダール・ヒマラヤがあり、ブリクティが許可峰となっている。

#### ■ダウラギリ山群

東のカリガンダキより西のジャングラ・バンジャンあたりの山群で、多くの7000m峰が連なっている。

山群の主峰のダウラギリ I 峰は8000m峰で8度目の挑戦の後、シシャパンマを除き最後に登られた山である。各バリエーションルートも登られ、現在はノーマルルートの北東稜に毎年多くの登山

隊が訪れる。その他ダウラギリⅡ～Ⅵ峰、チュレン・ヒマール、プタ・ヒウンチュリ、グルジャ・ヒマールなどの7000m峰があるが訪れる登山隊は少ない。

### ■カンジロバ山群

この山群は一般的には南東のダウラギリ山群と北西のサイバル山群との間、ベリ川とカリガンダキの分水嶺、ジュムラ周辺のベリ川流域までの山群である。7～8000m峰はなく、そのためかネパールでは最後に残された秘境といわれている。

カンジロバ主峰、カンジェラルワ、カンデヒウンチュリ、シスネなどが許可峰となっている。

アプローチはジュムラからの長いアプローチとなる。

### ■山域の区分

- A 1. Kanchenjunga A 2. Janak Himal
- B 1. Kunmbu B 2. Mahalargur
- B 3. Barun
- C 1. Rolwaling
- D 1. Langtang D 2. Jugal
- E 1. Ganesh E 2. Serang
- F 1. Manaslu F 2. Peri

### ■アビ、サイバル山群

この地域はネパールの最北西に位置し、カリ川を境にインドのガルワール地域と接している。

実際、アビとサイバルはセティ川を境に別々の山群となる。以前より交通事情は良くなったとはいえ、まだまだ遠隔の地域である。

アビ山群は主峰のアビを始め、ナンパ、ボバイエ、ジェティ・ボラフニなどの許可峰があり、サイバル山群はサイバル、フィルンコフなどが許可峰となっている。アビの北面はカリ川沿いのアプローチとなるがインドのインナーラインとなるため注意が必要。

その他これら山群の他ナラカンカール、チャンラなどの未知なる山がある。(文責：野沢井歩)

- G 1. Annapuruna G 2. Nirgiri
- G 3. Damodal
- H 1. Dhulagiri H 2. Mukut
- I 1. Kanjiroba I 2. Patراسي I 3. Sisne
- I 4. Jagudula
- J 1. Gurans J 2. Surma Saravar Lekh
- J 3. Saipal J 4. Patراسي J 5. Changla
- J 6. Urai Lekh J 7. Nalakankar



## ネパール・ヒマラヤ許可峰リスト (1996年)

現在、ネパール・ヒマラヤでは142のピークが許可峰となっている。以下の通りA～Dの4種類のカテゴリーに分けられる。

A. ネパール隊または3人以上のネパール人との 合同隊に限る。						
NO	山名	標高	山域			
1.	Bhrikuti Shail	6361	G 3	4.	Annapuruna III	7555 G 1
2.	Bhemdang Ri	6150	D 1	5.	Annapuruna IV	7525 G 1
3.	Leonpo Gang (Big White Peak)	6979	D 2	6.	Annapuruna Dakshin	7219 G 1
4.	Chamar	7187	E 2	7.	Api	7129 J 1
5.	Changla ※	6563	J 6	8.	Baruntse	7129 B 3
6.	Dorje Lakpa	6966	D 2	9.	Baudha Peak	6672 F 1
7.	Ganchenpo	6387	D 2	10.	Chamlang	7319 B 2
8.	Gandharava	6248	G 1	11.	Cheo Himal	6820 F 2
9.	Gurja Himal	7193	H 1	12.	Chobuje	6685 C 1
10.	Gurkarpo Ri	6891	D 2	13.	Cholatse	6440 B 1
11.	Gyachung Kang ※	7952	B 1	14.	Cho You	8201 B 1
12.	Gyalzen Peak	6151	D 2	15.	Cho Polu	6711 B 2
13.	Jongsang Peak	7483	A 2	16.	Churen Himal	7371 H 1
14.	Karyolung	6511	C 1	17.	Dhampus	6012 H 2
15.	Langtang Ri	7205	D 1	18.	Dhulagiri I	8167 H 1
16.	Bhairab Takura (Madiya Peak)	6799	D 2	19.	Dhulagiri II	7751 H 1
17.	Nala Kankar	6062	J 7	20.	Dhulagiri III	7715 H 1
18.	Nepal Peak	6910	A 1	21.	Dhulagiri IV	7661 H 1
19.	Ohmi Kangri	6829	A 2	22.	Dhulagiri V	7618 H 1
20.	Phurbi Chuli	6631	D 2	23.	Dhulagiri VI	7268 H 1
21.	Kirat Chuli (Tent Peak)	7365	A 1	24.	Sagarmatha	8848 B 1
22.	Urkinmang	6151	D 2	25.	Varaha Shikhar (Fang)	7647 G 1
B. 上記同様の隊に限るが登頂された後(ネパール人を含む) C に変わる。				26.	Ganesh II (Lapsan Karpo)	7052 E 1
1.	Bobaye	6808	J 1	27.	Ganesh III (Salsango)	7111 E 1
2.	Ganesh I (Yangra) ※	7429	E 1	28.	Ganesh IV (Pabil)	7110 E 1
3.	Jethi Bahurani	6850	J 1	29.	Ganesh V	6986 E 1
4.	Kangsar Kang (Roc Noir)	7485	G 1	30.	Gangapuruna	7455 G 1
C. 一般の外国隊に開放されているピーク。				31.	Tarke Kang (Galcier Dome)	7193 G 1
1.	Ama Dabulam	6812	B 3	32.	Gauri Sanker ※	7134 C 1
2.	Annapuruna I	8091	G 1	33.	Tripura Hiunchuli (Hanging Glacir Peak)	6553 I 1
3.	Annapuruna II	7937	G 1	34.	Himalchuli East	7893 F 1
				35.	Himalchuli North	7371 F 1
				36.	Himalchuli West	7540 F 1
				37.	Himlung Himal	7126 F 1
				38.	Hongde	6556 H 1
				39.	Jagdula Peak	5764 I 4



40. Kumbhakarna (Jannu)	7710	A 1	82. Tilicho Peak	7134	G 1
41. Shey Shikhar	6139	I 1	83. Tukucho Peak	6920	H 1
42. Kangbachen	7903	A 1	84. Yalung Kang	8505	A 1
43. Kagmara	5960	I 1	85. Api West	7100	J 1
44. Kande Hiunchuli	6627	I 2	86. Firnkof	6697	J 3
45. Kangchenjunga Main	8586	A 1	87. Firnkof West	6645	J 3
46. Kangchenjunga Central	8482	A 1	88. Nampa South	6580	J 1
47. Kangchenjunga South	8476	A 1	89. Raksha Urai	6593	J 6
48. Kang Guru	6981	F 2	90. Saipal East	6882	J 3
49. Kangtega	6779	B 2	91. Surma-Sarovar North	6523	J 2
50. Kanjerlwa	6621	I 1	92. Tos Karpo	6518	I 1
51. Kanjiroba Main	6883	I 1	93. Drangnag Ri	6801	C 1
52. Khatang	6782	C 1	94. Gimgera Chuli (Twins)	7350	A 1
53. Lamjung Himal	6983	G 1	95. Pathibhara Chuli	7123	A 1
54. Langsisa Ri	6427	D 1	96. Lemgpo Peak	6954	A 1
55. Langtang Lirung	7234	D 1	97. Gyajikang	7038	F 1
56. Lhotse	8516	B 1	98. Pasang Lhamu Chuli	7351	B 1
57. Lhotse Shar	8400	B 1	(Jasamba,Cho Awi)		
58. Lobuje West	6145	B 1	D. ネパール登山協会の扱うトレッキングピーク		
59. Makalu I	8463	B 2	aとbで登山料が異なる。		
60. Makalu II (Kangchugtse)	7678	B 2	a.		
61. Manapathi	6380	H 1	1. Imja Tse (Island Peak)	6160	B 1
62. Manaslu	8163	F 1	2. Palder Peak	5896	E 1
63. Manaslu North	7157	F 1	3. Hiunchuli	6441	G 1
64. Nampa	6755	J 1	4. Sing Chuli (Fluted Peak)	6501	G 1
65. Ngojumbakang	7743	B 1	5. Ramdung	5925	G 1
66. Nilgiri Central	6940	G 2	6. Parchamucho (Parchamo)	6187	C 1
67. Nilgiri North	7061	G 2	7. Mera Peak	6473	B 1
68. Nilgiri South	6839	G 2	8. Kusum Kangguru	6367	B 1
69. Number	6957	C 1	9. Lobuje East	6119	B 1
70. Nuptese	7855	B 1	10. Kwangde (Kongde Ri)	6011	C 1
71. Patrasi	6450	J 1	11. Pisang Peak	6091	G 3
72. Ngadi Chuli(Peak 29 Dakura)	7871	F 1	12. Chulu West (Gundang NW)	6419	G 3
73. Pumo Ri	7161	B 1	13. Chulu East (Gundang C)	6584	G 3
74. Putha Hiunchuli	7246	H 1	b.		
75. Saipal	7031	B 2	14. Tharpu Churi (Tent Peak)	5663	G 1
76. Shanti Shikhar	7591	B 2	15. Konga Tse (Mehra)	5849	D 1
77. Shartse	7459	B 1	16. Kangjya Chuli (Naya Kanga)	5844	D 1
78. Sisne	5849	I 3	17. Pokalde	5806	B 1
79. Sita Chuchura	6611	H 1	18. Mardi Himal	5587	B 1
80. Taweche	6501	B 1	※の山は現在許可峰となっているが国境問題など		
81. Tamserku	6623	B 3	で許可の取得はむずかしい。		

## ■ 寸 感 ■

中国の江沢民がインドとパキスタンを訪問した。登山者にとっては、この訪問によって印パや印中との間が良くなり、登れる山々が数多くなることを期待する。しかし、現状はまだまだ厳しく、パキスタンの国内政情は最悪の状態を迎えているらしい、印パの力関係でチョゴリザも登れないのが実情である。安定した国際政治が望まれる。(K)

## 事務局 日誌 (12月)

- 2日(月) ムスターグ・アタ女性登山隊協議。  
(於、ルーム、山森、辻野、沢田)  
中国登山研究会案内状発送。
- 3日(火) 中国登山協会へムスターグ・アタ議  
定書とニンチン・カンサ登山申請書  
送付。
- 10日(火) ヒマラヤ302号発送。
- 11日(水) ラッセル・ブライス氏講演会(於、  
東京、山森、中川)
- 12日(木) 日山協・女性登山懇親会(於岸記念

体育館、八木原、尾形、寺沢、中川)

- 14日(土) ~15日 ニンチン・カンサ隊合宿(於、  
ルーム、山森他)  
ムスターグ・アタ96年隊打ち合わせ  
(於、ルーム、中川他)
- 16日(月) 東京集会(25名)
- 25日(火) 御用納め
- 26日~1月5日 事務局休み

## ヒマラヤ No.303 (2月号)

平成9年1月10日印刷 9年2月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



## ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

## TREASURE TOUR



## EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、  
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる旅



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。  
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山  
シルクロード・秘境旅行  
のパイオニア



株式  
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



## Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004